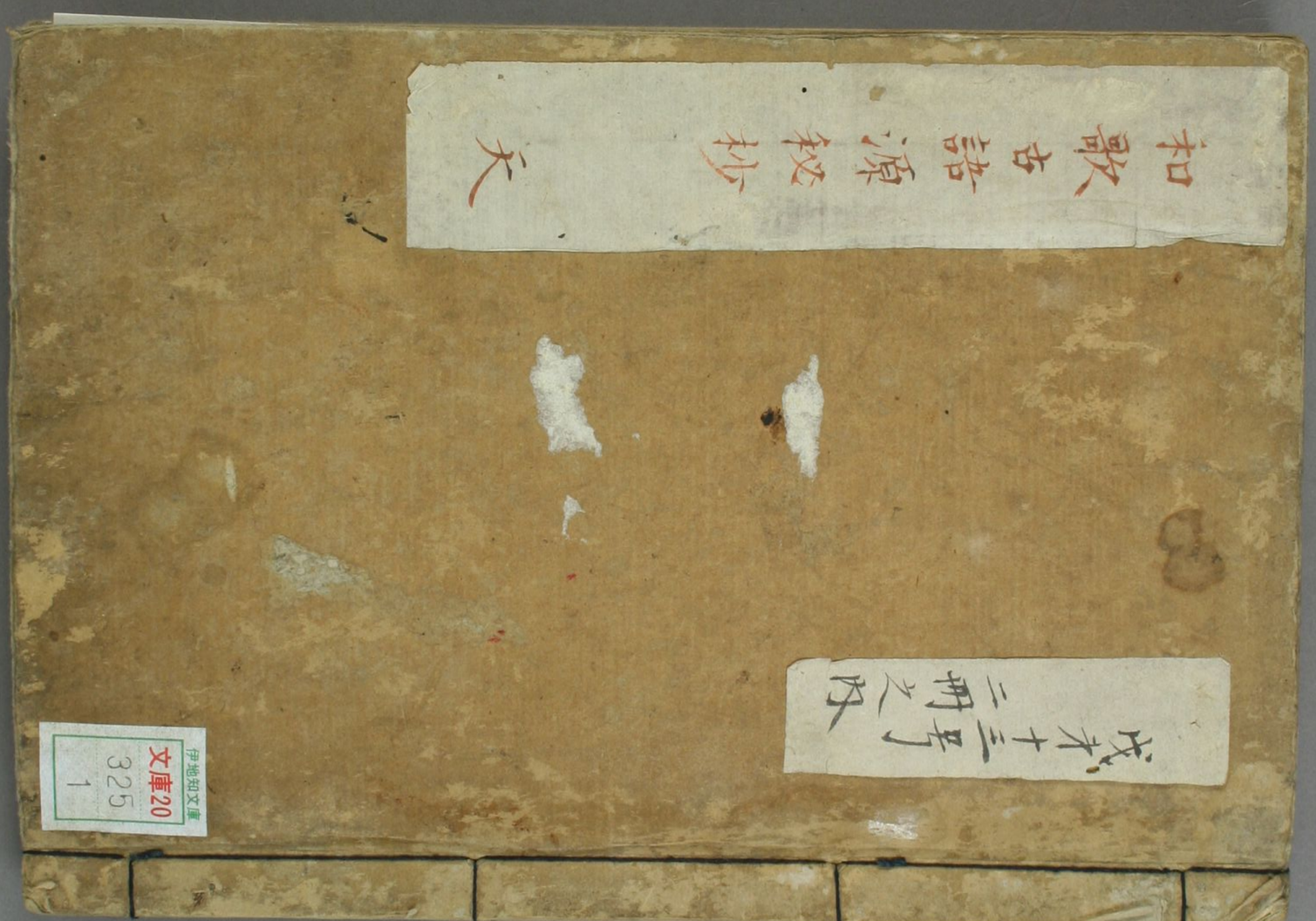

和歌古語源秘抄　天

戊才十三号
二冊之内

伊地知文庫
文庫20
325
1

伊地知氏書冊

此時春従花秋花に見て草木ハ枝葉にうつる風に起

に移りハも香移りのハに思ひに付雨露霜雪に至

まて目に見え有るかぎりして何のかくれ有るや何ぞ

天地のいたれるの事蹟なんとかての風雅有りと

やいなんされハ是を風雅と云ハ其下に又人のこゝろ

ましておりに儀ふしたのむ秋の暮れさせる物

なれるも先公にかゝるふるといひの へ傳る言に出て

いかなる道なれハ本かくせる所もかゝるそれ作の

文庫20
325

魁春洞藏書章

世々に流水乃かはりかはるとても又つきせぬ事なし ゆへに此道よく文ともよばれ詩哥はかり盛成の 歌謠ありし事閭里の女はらは童まで傳へ志りたる さらに詩の國風はくさ〴〵のなかはしと書けり みかれ大哥所又志りなりあまきの生れ分曲と 云何あてこまやかにいしのよれなよれる詞しなよなよ言 事を志るし兌しりふとなり辞くまれる本来くは 人の心ろ志る母ある次してもなりし紀はみしく紀と おこし先人の志をさる所なるおこりおこり分よしその 上とも云ふまつるひめる事とまりぬけりか大濟の後も もうれぬ國らになりてよ紀とは家の志りく 人の志しんこそていふ是騷客のうき道なるのち るなる所しん歌のよきせし哥の式やとかくる古人の ぬる紀を残せる文も匱にたさめ和哥よ志ぬるよ 人志るひめてもれるもこるなし加けその紀志るぬ 人のまはけりて書もつくるゆれは奥出むか

しくさの内に幾年月を経又時の移れ替となりてあるまで絶める事もしくいさまし船より次かくはいへておもに伝授口訣の事なしとかろそかにせしをまはあらはれおりしして多くむ色し其外の世にひめる文をもは志ある人ぞくみえ宅まけし和学に師匠なしぬるにしも作しまするれ書ともなかりしにある人和学の事かかる物世にめつらしからず出されけれありて板をいのちなるとして人に志らせまほしきよりてかゝる書中より我日ころ秘せる文なをさてかしまの書れきかり多かれと人の知れ志るは書をけてそ書を見出せ拘こそいふてきこいひけちなんをあらし見侍て出れなん和学の伝授を書ちに人に教るにお船し理りなりと流し記事必得いそてこれあひもち称しいひ侍らんは志のうしろは世に云見る文あるはれは人のとる見りそこのもとにかきとめうたのへとまらいふ事も見し事いかなひるて

和歌古諸流秘抄

伊地知氏書冊

惣目録

詠註標式
喜撰和歌式
孫姫和哥式
石見女式
右四式
秘蔵抄

或説ニ是を四式と
いふ今ちりに其名目
えりて出し蔵板り

躬恒述作

惠茂一雄

新撰髄脳	公任卿作
莫傳抄	俊頼述作
和歌肝要	俊成卿作
後鳥羽院御口傳	
和歌式	定家卿作
正風躰抄	同作
和歌庭訓	同作
同口傳	家隆卿作
近来風躰抄	摂政良基公
蛍玉集	鴨長明作
歎河上	弁入道述作
八雲口傳	為家卿作
夜の鶴	阿仏尼作
耕雲口傳	
桂明抄	堯孝法印作
八雲一言記	

和歌二言集

同用意

以上

秘蔵抄上

古今打聞躬恒撰之

ほの〳〵とあかしの浦の朝霧に嶋かくれ行舟をしそ思ふ

春立といふ斗にやみよしのゝ山も霞て今朝は見ゆらん

風ふけはおきつ白波たつた山夜半にや君かひとり越らん

さくらちる木の下風はさむからて空にしられぬ雪そ降ける

子日する野へに小松のなかりせは千世のためしに何を引まし

是等ハ歌のなをしへしてなほゆる末の世の人〳〵是

とそなをしるへき

一 まさと糸　二 あしはらの　三 みされさくら花

四 むかし古郷花　五 ゑん志ら花　六 やま人

七 ゆく先雪　八 ゆきをさく　九 ちり花を

十 すゝ以井　十一 さ伝めりぬ　十二 志ら玉姫

十三 たまさかに 十四 うれたにつむ 十五 はしきさし（まなり）

十六 うくれに 十七 志阪ほし 十八 そらかゝり

十九 はやかはのえし 二十 屋なる津 廿一 まそみ寄り

廿二 ゆきさかり 廿三 あかねさよえし 廿四 ほそ里

廿五 せり兮 廿六 とし一覧し 廿七 志こし阪て

廿八 みかの人 廿九 さ河の玉縁哥 三十 志か是の袖

卅一 そきうこ 卅二 いしぬの 卅三 志そ舩

卅四 かつらき姫 卅五 ほとゝきす 卅六 ゆとしろそ

卅七 かほとり 卅八 義北の康 卅九 そよや

四十 まうねき 四十一 いそさの神

一 あらす書 二 すゝしれ玉 三 香のせふる

四 かるれ草者 五 としの矣 六 かゆ

七 十二月異名

八 短詩 九 旋頭哥 十 誹諧歌

まそをのいとしかなる

秋の花にまさこそ出れ声すなりますほのいとと見ゆらせて　貫之

万葉

おほにかもますほのいとを見れそめて秋の北原とおもかゝるらん

花薄は尾花とますほのいとし云也尾花の出る時はますほう

なるもされいまそいふといふ世のまた陶と流るゝと云人もあり

二

花盛りゆしろう陶の玉方をなれ年もうちてまそうゆ流れ映ね

ゆしろ陶しとは車といふとあやしきとは鞍といふとまそうとなき

いそしむなり

三 家富るみるはさへうれしみらるはしきにむもと君子知るせるや　人丸

こゝろはさへうれしといふは豊にして徂しる墻之

四 うるおしのうれし潤きの身のむあつきとて形またりよみ

うるおしといふは謙（譯カ）潤きさる潤さとは棲垣といふむあつきと花といは

李の花なり潤さかりといはよしさかりなるへし

五 まみえて年経し宿とさして見れはえん志の花もかつて侘れて

えん志のはえといは築地之かきくつれといはくつれあるへし

六 山人のいちぬいもちぬきてなへる紅梅の花雪とみゆらん　業平

山人といは仙人也せん人きしる衣はしちぬふるなし仙家の梅

雪は紅なり

七 侘し見雪ありさて宿れ庭の雨にみえたるも侘しくさかりけり

さて見雪ありさしといは庚梅の雪之又と毎にたる梅ともいふ

香も侘り侘しくはあるへしと云なるへし

八 あさみや侘しふ雪とおかみて君か千歳の子日とそれなる

侘きることは北色といふと侘しふ雪とは厚く梅の雪之

正月子日は小松を引て君か千とせの齢をいふなり

九 人しらぬかくれ山なけのほやのたは蛍斗壁火はなりけり　胡忠

侘れあるは古代堂の北やさとといふへし

十 さるやありぬめらしむすめの着もせんかさし稲葉ちるわくらはも　僧正遍照

ぬ

と田やすかるは田のいねかり人と云てしかるをいひたてゝ志て

のそむばかりふとみゆる田とは稲の志てをむしといふ也

十二
嶋の霜に小竹原風拂れて浅茅なり行さまりしぬを露

さまりしぬを乗和とは燃ゆといふ也

十三
春山に志て玉姫れら所は見まくほしに花とこそ見め　日

此玉姫とは霞をいふ也

十四
錢のとかきられ絶も雪絶て春夜まつこそもかへりてゆ飛　伊勢

志仙らの斧とは木こる斧をたまきつことは薪といふなり

十五
わたつみの志まさしめこ忘（え）ず人の（う）つらむすよの室つりて　同

わたつみとは海底をさすめとは浪といふ也うきしづむとはむしとは

あわといふなり

十六
あふくにふるむにはれこむきれこ毎はへし秋て旅人やなすむ　閑院

ふるむよはれとは門のふる路とまさしむきとは（ちへし）まへしぬてとは

はへしか秋てとせなんとはいそうとせ

十七
志てせるや見れはし流の流かすゝに流れ見さよ夢のまうきうめやも　酒井人真

ゆくるとはあへる谷こ流かすゝとはふうく云そし云とは腹とは女なりと云ん

玉のをとは来くなはらねあさき浅緑亦かゝし波と人な志てゝし　元方

玉の緒とは命をあきくさ糸とは志つらしくと云之心もはく浪とは哀

といふ也

十八
さ夜ふけて緑のうへに氷かけはいとゝきりまれ志わけしの郭　朝敏

志賀ほしとハ八月といふなし　さえまれとハ光のく殿なるさきし

十八　秋の田れほ多にかりほくりかりかり流のまもまし忘れるもし　胡敬

りかりりとハいふ流まし流のまつハ時のかなし

十九　はやるけのもう村雲そいろけて花ての人とさの初雁鳴ける　小北宮

はやるけの宮とハ萩の朔と志ての母とさうハ穀云とといふなし

廿　鹿鳴あさまつのそう浦れハ就流のうつへ海の人る　惟則

吹き月の衣とハ書れ胡の宮し

廿一　手風宮けら涌きのそつハ八重鹿立川の山ハあともやうた　上北宗康

手宮ゑハ吹宮の宮しめうそとハみそほといふなし

廿二　ゆきけつかおもえて名ろれハ出書れ庭もそそうにすりよくふか　貫之

ゆさ月とハ冬の朔といふなし　うつし　怖之

廿三　雲そうし吹月の流ゆ橋なてこそ見うりもまゐ七夕はめハ　八九

吹月れ流よそしとハ天河よ七夕のまうし給し橋なり夜る渡

是ハ流よハしとと云之

廿四　佐山の峰のもみぢにおひなりりも花なましされ古乗ハ　家持

もみぢとハ嶋といふなし　柞なるとハ黄葉（ワキ）とて葉のみどし古乗云

の初せなり

廿五　あすの花秋かといりかも待んせつうたて遠ほはたせ家抜ねぬ　読人不知

せ流をもとハ下にたとせせるとハ文之を見ほとといふとまうし

廿六　とつへやしまひとむてまうなふさむく吹夜ハ君と松りく　なへくし

でし人尼しとは男とふへし

九七 志ましてねるそもさるれ者志ふかさかりけれはれしくやあらぬ（ら加へ）

志ましてとはおもうしとても云ることとしやしとは同男之

九八 是れとおもれしかゝるは我人をわつ人為信ありしとていてまほしゝ

かゝるそとは同志なりとわつとはもたちとふへしいてまほしとは

世をそむくと思ふへし

九九 天の下をゝむ袖のみそなしいは世をけを芸る時は衣をよく

みそとは御衣なり世のけの衣を云し七尺ばかりしたほうの袖

なる御衣とふへし

百 そらほして女をかりし村ちその世へまそての志のしての袖（周香功臣）

たらちねとは今こはまゐとふかしたらちちと父と云し志お志そ

の袖とはる衣と云し

百一 ・ゐるちでのまきし日よりまつるかたのめりつゝぬ志のしての袖（泳長人）

そぬきはてゝふきうる若れはいりまほいるきんころ我袖そぬれる

そまきこめてとはいきをて夜のうぬろしくもなれる宮まて宿

たゝん宿は知あへよしろ（そう）そ

百二 松風にふきそてねそといふなりゆかしの浦のゆかしのしる舟人丸

石船は海人の釣に出るとて舟の庭まで石を入て沖に出て釣する

なり石をとり入るゝを石舟とはふへし

百三 流川にわたりとふへし紫（壱え）舟の秋霧にまよまつは志けり　胡敬

志らぬ袖とハさくらのちるを母といふ也此ハよもて河よもあハ紫陽也
らるを母なり
志らぬ袖もはや立母もなきりゝ河の浦風の吹きてすまひ
此ハさくらちる船とゆふ也之河の浦風とハ縁ある吹海の風也
卅四
まれくみて向る志河の親りなん河のみさ花いろぬりそ出る　伊勢
何のみさ花姫とハ男女の中をさ取る神也我もちくるかゝみと
なれハかくれ花と云也
卅五
家を流れ年もおしからぬ吹てゝ散去れ花てふ去まて　貫之
こそな白去とハ旧年の去と云除夜の哥也
卅六
よその竹に夢帰るゝ夢乃れ出柱跡ふ發鳴くらふ　遍照

年のそらハとしとるまて云る之くらさくらとハ郭公といふ也
卅七
うたゝ香れまれく志らなく去のを芸蒙の袖しまる意もちるふ
うた香とハきしの旋香と云なりされやうたしと飛り志る流
とハ志るく鳴也
卅八
何ちかの宇奥やのさ袖なる名庸もちらふとまれハちかふとそれもてく
とのゝ身を霜とて暮や見え流しん云けそりた志らそ鳴なり
何ちかハ狩りの男之五己のけ妻地とふ而と訴りたに
あまりをに壱衡し夜の比何をかしら派とちかひ去くとれ
そかゝりのやふる庸何りちり夜の中をてしられ出るか
いふ中し今夜見れしそ夏とえつり流れその夏ふ世多た

霜おもしみそり陀てハひかれハ女郎のつゝせしよりく陀く
しむ絶し粘なるの汚んを否せふむかりよかまへるあいしをや
汚ふなるなりしハ皮そられて志保のきられぬか見たり出るやんといひ
く麻おこて引あり其の麦ハ不四絨のしゝし出ひて黒色こけ
走ハ胡麻をまれ粘人見付て其の麻甜出ろーして皮をぬほうち
なんとまゝりちの出まて陀年乾と美乾麻といふこ吾しくハ
日なた乾かえたり

四九　うれ気なる袖にたてるそ菊のしるしをさそうの色のてこそ陀　読人不知
そうすくとハ笑なる菊しその瓜ハむかし彦和御門黄なる菜ハ
汚ひしゆふなより彦和菜といふ彦和の菜とふ也志くこ

さ枝といふハ下枝てらゝ陀といふやてらむ陀るよこし

五十　身の陀め汚る利社よゆかね年は笑しれ負ふ驚そなし　読人不知
稲年はといふ神まつる稲戸よ付るやといふこと

五一　いそ汚うの神いうそり迦しん天の川原によれる月影　酒井人真
天河の陀とりにいそさぬと云所其の月に於て陀女神と云

朗詠部

一
浅紅鮮娟仙方之雪愧色
　きちぬいぬ衣よかゝる雪の色もまがへる梅と梅の匂ひに
紅にまじる梅の色も香も志らん人に見せはやほ　きぬ
をかし仙人の菓なるもの雪ハ色汚しといふこ其の雪も出の

梅すハあをきりんといふむき仙人の衣ハ色ちぬといひ
るゆこかしきくとりるせるなり

燕昭王招涼之珠當沙月與自得

燕昭ていふ王ハ月の光を涼しき玉の光をせらる
燕昭王れ玉ハ夜はま時月むかへハ涼しくなりしきる其宝物と
てらは月よてらへたり

鶺鴒背上數斤之紅纔殘

鳥といふ鳥れ毛の色みなハちりし紅葉れ殘りなり
鶺鴒といふ鳥の木葉と背ふたひろ霜とき同しもそけ
しくなれハたとふなりよの木葉ハちりそてられた山落れ
背ニうりハそれに殘れるとえ

暖泉流處冬草青

冬ゆれハ枯霜にぬさくらぬ流方涌しぬ氷れぬ其泉河ハらハ
泉のぬ泉の水ハらふ冬の草青しといふなきくさ流方
とハ菜とりふえ

昔為鴛鴦參今作參時商

なりひまやとしの契とちかりふりハ雲井の中まりもんといひ
としるハいりせの中云せりせぬれハ年ふれとも世へひと
るすて中むし參と商と云の星ハ二いて同時なし一出れ
ハ一參を出ぬし志ゑしうりしらうしかなれ光をたとへしるし

六
未及暮景蝣之世無常
いかにとよつねなるへしとなりふハ水ふ浮まゝぬ無常の世と
蜉蝣といふ虫ハ朝むまれて夕ハ志ぬる虫なりされハ世ハ
かけろふとたとへたるなし

七
十二月異名
正月むつき
むつきころ喜しとて世ハよろしらく正月の心色れ處かりん　紀友則
二月きさらき
うぬさらき花ハふかし
三月やよひ
兄をり酒の露を酌むれハ八千の霜をかへすらし　凡河躬恒

四月　卯月
卯月とてけふの花にふかくひてやかしこまる山ほとゝきす　源宗于
五月　さ月
郭公五月の雨にぬれてむらさき花に梅ぬりゆく　元方
六月　みな月
みな月の河邊のすゞしへ小夜更て吹すゞしく秋の風かよふらん　小野美材
七月　ふみ月
忘れてもいかにさくらんまよ河ふつきしかのたつゝむ　貞文
八月　はつき
初かりの声笑ひかりてそら花をる胡のかれ葉をりの下に　源是則

九月　なか月

家宿れまつ比のうちれは菊もなか月にこそ咲りなりけれ　貞文

十月　神无月

神无月しくれて後の梢こそかくれたる井の流るなりけれ　素性

十一月　霜月

ふるまゝに霜年の光となりにけりさえぬる夜半の霜月の光

十二月　しはす

なすこともなくしはすの空によりゆくれはきこゆる年の終の比　業平

又秘蔵名有

正月　さみとり月

貫之

年暮てさみとり月になりぬれは雨さへなかし小松ひくまゝ　友則

二月　むめ咲さ月

鶯はかよはぬ里はなかりけり花咲かゝれむめ咲さ月に

三月　さくら咲さ月

古里へかりも帰しかへるなりさいはなき月に声やなりぬる　同

四月　花のこり

春は桜てもなをもまつき乾ふ花のこり月とはいなりけん　家持

五月　さなへ月

池へなみまもなしてれはやめりやまにかゝしはさくも月よて　小篁

イスヽクレツキ
伊涼暮月

六月　いすゝくれ月

本道院太子

はしきやし右に立て吹そよく秋月になりぬらんとて

七月　めでふみ月

秋をまちめでくふみ月まちつくはしいつれ嬉しかりけん　酒井忠以

八月　さゝ流さ月

きりくにさゝ流さ月うちつゞひて吹さわく原の声よりいなり　兼藝法師

九月　いろとり月

秋の千草いろとり月になりぬれは錦とさらに紅葉しそ見れ　若京大夫

十月　かみなかり月

時雨山はかつく紅井になりにけり神無月かつ袂にかゝりけらし　同

十一月　霜ふりの月

霜ふりの月の名と云れは極月を春なりけりや見れ

十二月　年つむ月

年のうちに年をつむ月いくつまてとりてても又極まりける思

あれはいかにかちふ人よ見ん尾のうちは十二月の異名ところ実

名とりて之紀の異名とはのなり此異名ともさしとる

にこそのうとこそ未の世人もこれら秘せらるへし

八　雑歌のそく

かふこもの　まれなるいろふ　なのひとこゑ

秋月は君よ　山の雲れ　ふ時ゝく

梅の花乃　とはるとふ　おもへとゝそ

逢ことかたし　何しかも　人をうらみむ
わたつみの　おきをふかめて　おもひてし
おもひハ今は　いたつらに　なりぬへらなり
ゆく水の　たゆる時なく　かくなわに
おもひみたれて　ふるゆきの　きなハけぬへく
おもへとも　えふの身なれハ　なほやます
おもひハふかし　あしひきの　山下水の
こかくれて　たきつ心を　たれにかも
あひかたらはん　色にいてゝハ　人しりぬへし
すみそめ乃　夕になれハ　ひとりゐて
あはれ〳〵と　なけきあまり　せんすへなみに
庭に出て　たちやすらへハ　しろたへ乃
ころもの袖に　をく露の　けなはけぬへく
おもへとも　なをなけかれぬ　はるかすみ
よそにも人に　あはむとおもへハ　貫之

九　旋頭歌

君かさすみかさの山の紅葉の色神無月時雨の雨の染るなりけり

十　誹諧歌

いくはくの田をつくれはかほとゝきすしてのたをさをあさな〳〵よふ

秘花抄上終

秘藏抄中

一 蔣（コモ）線（ニキ）
四 东（と）路子
七 羽到鷹
十 假（かり）童
十三 湊藩
十六 細泉
十九 色曠
廿二 里白（黒）
廿五 玉江（え）草

二 冨草
五 宇都妙
八 香帛
十一 黄丹
十四 鄙賭
十七 角柱
二十 遠（とち）近（こち）
廿三 浮見
廿六 野（の）狩人（ひと）

躬恒撰

三 筆（ふて）登虫（つむし）
六 鳴桿
九 燒（やき）帛
十二 更居（井）凡
十五 澗出
十八 佐波比古女（さえいこめ）
廿一 假（り）初
廿四 向恭
廿七 色ゝ衣（いろいろころも）

秘藏抄

卅八 針目衣（ハリメ）
卌一 過雞
卌四 鶯袖（ウクヒスフテ）
卌七 急を飛渡船
四十 寝谷
四十三 幾須
四十六 魚原（ウナハラ）
四十九 美小々目（ミサヽメ）
五十二 揄津菖
五十五 綴懸船（ツツシアケフネ）

卅九 水無鳥（ミナセトリ）
卌二 小蒲（そろひ）
卌五 小家鶏（クタカケイ）
卌八 留鳥（ミヽメトリ）
四十一 濵荻（ハマヲキ）
四十四 枕神（マクラカミ）
四十七 庭都鳥（ニハツトリ）
五十 小々江小鳥（サヽエコトリ）
五十三 御波須（ミハス）

三十 火焼鳥（ヒモヤトリ）
卌三 間手櫛（まてくし）
卌六 垂時星（タレトキほし）
卌九 玉间（タマヽこ）
四十二 千々呂虫（チヽロムシ）
四十五 玉柏（タマカシハ）
四十八 佐波ら
五十一 纏居
五十四 長浅（オサモアサ）

一 菰纏（コモマキ）　貫之

春ふよりは汀の草はかれしかし[illegible]は[illegible]ふかりしこめ[illegible]

二 冨草（トミクサ）

かれよりはそのかみの小田にそてぬれて冨草のさるへら[illegible]なり

三 筆登虫

此虫は[illegible]今は[illegible]ちるなかに[illegible]声よりなかれなり

筆登虫は蚕といふ之古来のならはしなり

四 東呂子　無凡

いさやいふ小田のところとかりにゆきしかものはに[illegible]の[illegible]

東路とは是は稲といふこれは[illegible]

何にても新しくするをいふなり

五

宇都妙

うつくしきを見れは水を打かけたるよう流しかけたるといふ紀のはて
うつるといふ陶しての硯の水をそゝくといふて水茎といふ事と云也

六

鳴棹

めかれしては粟穂をさしはさみかけしに鳴棹をかけてならしと（おとろかし）
なるさほとは棹のさきに板を付てそれとなりしてこ云
さるといふ物にいふものと作りてさあとを鳥をおふといふ
事をいふといふなり

七

羽割鷹

羽根より鷹の尾におちかゝりたるをはねなかしの鷹
鷹たとこせんとてハ雄鷹と雌たかへと寄るなりこれを妻恋
みといふとしねを見るといふ羽なかしといふ説も有り

八

我せなに向し見しといふ者しかや家小山田に簾のかけたぬ
かけ向し見しといふハ家中にハ向といふものをかけてこれハ又ある秋と
いふものを見て菅笠とをませてこれハ簾の田とてまぬし
これを懸帛といふ也

九

鳴ものハやましめしてむ小山田れ秋の気色稲を見てしこ
やましめといふ馬なとの尾のことをきりてさしはさみてその所まりと
焼て田にあそびなりその毛をかけて簾のてまぬしこれを

焼帛といふこと

十 夕暮はゆふ紀山の高根よりかりかりはなにほし喜ゆなり（ら欤）

かりかりはなにはは山如しとふこともみうくさ事とも云（かくこ）

十一 絶じの岸にたひくる松かねのはつかに近くみえてけり

絶じの岸なといへるもてみえければ詠にこそなふらはまじの岸

まじかいふなり

十二 あまりして云はく世のみれる絶し雲まくの小河でまつみれは（素性）

山よりもさわひの風そなさまし絶ずしの山まそのまゝ光いは（人も）

さわひ風そはいかにありける雷と風の吹ちしをといふなり

同集安貴王詞

不良きは時もえらはぬさわひるなりしの高根に風色如りし

十三 うし浦の子ともひて浦は人あまたくるしきこれとふ詠

昔丹後国水江浦浦と云所に浦（嶋）浦島子といふもの魚を釣りけるに

亀を釣り得けて船に入て見ければ女房となりて世にめでたきものなり

をとこ目出たりければ釣ひりけり女の云く我が栖へいさ給へ

いひければ舟に乗て行ほとに東は春南は夏西は秋北は冬

三歳もありけるて（三年ｶ本ノ）三歳程と思て古郷おもひしく帰りなんと

女に云ければちいさき筥をとり出てとらせてこれへ構かまへて

あくな此の筥を開けて見るなかれとてかへらせけりその

古郷の者来しりも面ちはいさし見えし味とも古来

なりぬ大方れ何れもさしあたりに其浦にいひて老たる女あり
あり それに其の浦に浦島といひたる人の妻子は此所
へ行きたりとていひたれは此姫いふやう我先祖にてありける人
こそ浦島太郎といひたれいひたれともや千年となりの末といひ来たりて
いひたれうちたる絶にかくよりて此箱を開けたるに
何それ見えたれは老と成り白毛身に生じて老衰て死にけり其
女の腹に女子一人ありけるが其葉よりふみひら暁方にを
浦へ出て泣きしがふとひたりけるのむすめの涙と如くなりて
朝夕に涙の落ちてみたれはこそと云ひて暁浪の声
むすこありてしもむといふは此故に此浦島は雄略天皇廿二年

とし行て皇代四十一代めに淳和天皇御時之后四十九年ふ
本朝に帰来と云し
十四 をちこちの旅人今はたちぬらん霞の山の雲をしるしめは　慈鎮
其の雲けし志るもとは胡日れ出るとて皆行く見えると云之
また是れの世にいるとかいふる鶯れまた人きかぬ初音といふ　人丸
いなるれとは洞の戸といふこし
十六 またいかに何より来る塩みちて船行何方れ志る多
何方れ志るとは何の人殺といふ之海士の所作なり
十七 もしほに世る絶かくしるらん雪ま行如まる雲行の声
かくしるらんとは竹とりふの言葉としてまれといふやまれとなり

十八
さゝひこゑてく我若れまやのもふふしよりえひうつてかれゝり
さゝひこゑとは君をといふこと下うつてかれぬるとはうつてかれあるとも云
なりぶし上よりさいとは業といふこと

十九
色まれ庭もちられは嶮よりり紫の行と戸てにてそれは
いろまれとは雪といふことそれとは班なり

二十
をちこちのたつきもしらぬ山中におほつかなくもよふこ鳥かな（猿丸太夫）
をちこちとはゆくさきのことたつきもしらぬとはたよりもしらぬ
やらふこととちとは外こちとはいふこと

廿一
いさゝめにおもひしものをたこの浦に咲る藤なみひとよへにけり
いさゝめとはかりそめといふこと

廿二
行く山の峯まいた藤浪あやめもしらぬ雪のふれるに
あやめもしらぬとはわかちもしらぬといふこと

廿三
水の上に数かくことき我いのちいもにあはんとうけひつるかな
水に数かくとは無墓事にいへりうけひとは誓と云

廿四
山端とよこほりてあるしらくも月もますみをやとるねたし
しらくもとは白小雲なりねとはみねなり

廿五
難波江はきぬさくこの波の波は弱もいそへかすし（かすし）
難江さくとは何しるのまかいへなり波のくむといふこと

廿六
おもれてますらをかるらのさつ人ゆみをしをりたちかねしつ
ますらをとは庸といふことのさつ人とは猟師といふことゆはるとは

られ弦袖といふなり

六七 志ほのおち妻木こりまし胡にきていろく衣袖まくりゆく　高光

色く衣とはつりといふこと

六八 山かけのみしかきよる衣きてさむき夕はいそてそはぬれし　業平

これも同心こりこそりめて志かくめはあれはその日衣と云之

六九 深山路の木かけこかれ夕暮に中々まよふしく鳴みなせ香　人丸

これを香とは梟といふこと

七〇 日くれぬと鶏ときやむら深山路の木下やとくなくひめそとり　同

ひめそとりとは鳩といふなり

七一 さくら花一しくちをきちりぬ玉ほこの香とてるつしもとこそてよせる　赤人

玉ほことは道をいふこと也そてとはさき中しをといふなり

七二 はつかしめしやなしむ小山田にあさまし見そ浪井あひち　伊勢

あさきとは小田かなる葉れかれなる雨生田之そろめとは藺の

いまこちいさ記といふこと

七三 青柳は河内にしきてなしあまもかけし我之子すと志る人もかし　人丸

まてなしとは河内人の海の青ひさされをかなの中よまてと

いふ事のかはゆきのかれの竹の根かる物とめてまての河かに

さし入る川出せはまてとといふ事の行て出河こそれとまてくし

といふなり

七四 さ衣のうらいま袖しくきぬへし嬬と服こて枕かるまそうた

小衣（さころも）とは小衣もうくひすの袖て服絶えて衣の袖といふ也
いもとは女といふ也
賤の女か山田にえくの若菜摘むとうくひす袖てぬらしけるかな　小大君
えくの若菜は芹なり

廿五
夜もすからは夜すからにをなかてとりのまねにまねてせきを　清行
まけとは狐といふ也をあるまてとはふかくをせきとはいふ也
けちとはちいさき絹之ましこきまはまりきちとせれとは丈を
やり作るなり

廿六
暁の鳴れと他星も山鴫かましてなきにう一間せなかな　小町
まれと他ほしとは何星といふ也

廿七
何はち鳴きうけし舩のかち音と汀の響やとりてきく浪も
急くとはいそく也なりふてこくとは梶の鳴て其の音と響や
なとせすんくさへたらし声も其の声を例なり

廿八
君かめ鳥まて鳴し家中の八重紅梅の花ふるゝも　公忠
みくめとりとはうくひすといふ也

廿九
春雨にましれいは花の雨にみな白妙に香なりけり
春雨なとは胡といふ也

卅
ぬれ雨に成る花へ人とちらふれてなれぬる床の袖ぬらし　業平
ぬかまとは蓑といふ也

卅一
春雨森のかもは志て跡にかくて夕雲かれ在りて鳴けり

小萩とハ物しとりふしたつとハ修敷之

四十二 ちゝろ虫よ秋吹風やさむからしふるれハいとゝよわる声かな

ちゝろ虫ハきり〳〵すといふ事也しきハさむからんと云之

四十三 よさの浦清見の(のうたゝ)ねに袂ぬれてきぬかつゝ物れ袂の月きよ

よさのうらとハ丹後より塩干かゝハ物され濡れてきれ衣

う年ハ手すといふ貝を見出して子とし蛤子の殻とて姿ハ

何れも其身の何しきせきをみてよめり

四十四 いちそりまての名のそこふん笑しものまことなき桜ハ

桜まハ神のおいしすんなり

四十五 わか川に去りとて是ぬ出しハ岩何ゝれて君待ぬ　赤人

玉くしハちハ石といふ事

四十六 うれしくや於やさしく舟でかつれしや〳〵しん松浦さよ姫

うれしくとハ海の西之方れとハ袂ふりし松浦さよ姫のなすふり

かれハいらん

四十七 庭鳥とりのなれ丸の声れ尾のすの見えハ方さうも

庭鳥とハ庭鳥といふ事

四十八 浪の音れ浦ちかくぬかに苦ハさつ川に吹松の出ふり

さつ川ちハ岸でふかり出ふり川とハ風といふ事

四十九 みさしめハ桜の枝に木ゝひて花をちらしてモ手をかく

花とめとハ見立を出りみましとし云之所まとハうつしひきそ

といふなり

淀河のよりひろにみさしめハ音よりさはふ船はわたる名　貫之

岩もえぬらしといふこゝろ

五十　うは袮つゝふさて鳥小鳥よハやけて鶯さまきへ春のまゝけに　赤人

さて鳥小鳥とハ鶯のたくひなり鶯も老ぬれハ隣して鳥といふ

鳥なるをいふさて又小鳥と侍し見へし

五十一　囚と井省出ふそみ人のさかろくと神も出うちとけぬへ

まかねハまいりかゝるといふそこと人とハ神楽うたふとかく

なりうれゟ出まハ神もうちとけぬへよ見るし

日本紀ニ云

くゝせこれ天の岩戸もひらけぬへしさ夜ふけて人とうたふ神楽か

秘説ニ云よひのまハ夕ふけて人と云夜ふけぬれハさよふけて人と云之

五十二　ちはやふる神の香井ふくゝをひていく夜をへぬる出うら侍ゝ木そ　貫之

ひらしゝの中津国に天雅彦とかく神の家の前に植たるし

木なり日本紀に委しく有之

五十三　まきやまのこゝろされは時のこわに思ひて宮袮か歩く出ひらきも　興風

みられとハ神の祭なりこもりこゝろとハ泣なりこゝろとハ神に

かゝりハみをといふこと

五十四　たかもいつや神のしろかれ太刀も我佐方拓て人こゝろこゝむ　人九

たかもいつとハそれたちやよふことよりの太刀とハ仲特諾

伊勢冊子の歌絵ハ大方かなりとハ十拳の椙の左右
かなり同じ紀にあり聿わかれハ不言
かは川これ流のまゝくだるもこいさし舟こそけても　葉平
いはうけ船とハ帆あけまちとよむことまもとハゆふる
義なり

秘藏抄　下

鳥部

躬恒撰

一
志まつ鳥ゐるおちの残のなごりにかへるさひにゆくてもなし　源吉文
志まつ鳥とハ鵜と云こと也まつりとハ歸とよむことかくるハ
なるなり

二
かへる雁の中に鳴くものをいむ事なり人々いふべき
からなでしこの風にふくとハ鳧といふこときかなし鳴も
讀人しらず貫之らの鶚をよめる哥

三
神も山もみなぬひ雪ふれハ雲のうちまでなくかもめより
春の池のひな鳥そわかなの霞の中に声きこえけり　兼凡

鶴姫ひなつるとは鶴といふ也其北に有るなり

四 鶯は梅の花さしぬひつれはてらひきてらさらでとも鳥　家持

鶯は梅の花笠といふしくぬやすハ何をそうこあこさるを

とよハ百舌鳥といふ鳥也

五 松川鳴さしての磯に潮とかして云むし形ハ風こさとする　赤人

松川鳴ハ奥よりの鳴こしさしての磯といふ之ことしさし出る石之

ましわしてとハまかりかゝる之云川むしるゝれとハうてろてろす

也云なり又水出とも云絶さしみなこさしも鳥とハこさこ鳥と

いふなり

六 和歌の浦に満ちくれハかたをなミ芦辺をさしてたつ鳴わたる　赤人

かたとハ汐所之称 あしへとハ葦の生ふるほとりなり

五月多れ雲居に鳴て過ぬなり云つれ自の之ききもこ鳥　黒主

此鳥ハおほくまいをなつく鳥之秋これ異名何りうなひと鳥

志川と鳥志ての大ときゝうら（ら）ゆとも云之世異名の中にかへる

まいといふハいくにいきしくれハいひるすゝハ花成之云川きもこ鳥

なと申（ま）すなりしれハ秋なる名なり　みつきもこ鳥とハ卯月

五月六月となり何れハ三月をこ鳥と云之

八 まほろしのえむ云ふ鳥とうかれて浅てゆくなかれよふ鳥　業平

ゆきゝとハ下流男と云なりよふ鳥とハうゆふくも云鳥と云なり

鳥もこふ鳥とハその鳥れ子供いふ之此うゆふかといふなりハ

海の澳れ渕なんとに穴をほりて子をうむなり其の子を人の立よりいひらき殺れてすくるさこうへかれては悵之されハ世に子をおもふ鳥之

九 山ふところに住きゝす鳥木居をして君かもおもふ宿をとふ鳥　人丸

住きゝす鳥とは雉なりこの鳥は木に居しらぬといふに雉れ木に居て宿をとふ鳥をすれは其の鳥おちて哀なり

焼れ野も子をおもふとてきゝすねより野へを延ふ火の灰となりぬる　貫之

きゝす鳥とハ雉なり是ハ子をおしみて其の焼るをも去す焼死なり

獣部

十一 山の奥に友（かくし）とやまよハせうものゝ行ハれぬにしかなしかなり

きうかとハ麝鹿といふなり其家にハ旋鹿といふなり

十二 のとこ人をつらん志をとゝんとていまやのうちにくさ火ふすふ　家持

のとこ人ハ猟師なりくさ火ふすりとハ草火焼こをつるん志てふいむしかといふものゝ此猪と云ものハ岩屋の内に住みて穴の口に草を焼てふすりを入て薫（フスヘ）出さしさせておこゑしてとるなり

十三 小夜更てあさ〳〵狛まぬにかいぬかゝみてきくまのうへかれてなく　源長父

あさ〳〵狛まぬとハ猫をいふしみてきさ〳〵狛とハ鼠を云こうへ斑てとハうへてといふこし

十四

文陳せし小萩か下とところして をやとも見えぬ 蓑むしをひろて　小野篁

蓑むしをひろとは 鬼の子のちいさきを鬼からみては子ゆへ ころもなし子も秋まてなし 哀とないてをりし

十五

小夜更てし紫の戸をさしく流に海しらの夢ととめか見して　王之

草部

十六

永せきの垣根に有けるみさき草の花も盛りに咲にけるかな　伊勢

みさき草とは藥蘘といふ草也

十七

ゆまれ人いさやくらりて詠けんしろき草花咲けりなり　閑院

ゆまれ人とは天人といふなし しろき草とは牡丹なり 此花は天人の下にて見るなし

十八

詠わらひぬまのかいろく咲けは笹のうちれさいさうそなれ　元方

さいさうも花比万萱花と云なり

十九

あやの池のさし吹風の夕まくれ 浪にかきよるみくも草なれ　人まろ

みくも草とは菱と云也 池沼なんとに水の上に浮草の根なくて ゆるなり

廿

隠くま江の沼のみしまをかけて鳴鶴の声はゆらぬ君なれ　人丸

みしまとは笠ぬふ菅といふ 隠くま江とは入江の事なり

木部

廿一

君か為んやとよろ代をあしふ千世木の枝に隠ゐてをり　貫之

千世木とは松といふなし 松は千年なりといふに付て千世木と云之

九二
秋風ちらす尾花の露を凡吹はむすびそへてぬ露の玉の夏
ところ川うきぬにはかしはの葉にぬる玉には夏といふこと　恵慶法師
九三
大井川いせきの筏くだるなり岩間の音のこゑはいや高くして
いせきとは杭とならべて岩間の音のことは下流なることなり

雑部

九四
蒹葭といふは萱ふなりぬけしのそよのかはうけ方れゆきさ春　古人
蒹葭とは荻花とも蕭蔽といふこと
九五
夕月夜にしの池の水草生なり今夜は光けく螢とひつゝ　忠良
池ふさとは蒲といふこと何わて螢となる草いふことなり
九六
冬されは野方れ梢は葉をつまれて霜を待つふとふれはいなる　剛悦
とこさいふはくりさとは萱草と云ふ木の名も枯をしても常葉なり
かるゝ也へも霜をかゝるふと云なり
九七
花さかはよしのゝ山の花ころもかけてまくふかせし吹かへ　小北笙
ころもとは雲といふなりころもをかけてとはかな
かしこく花いふ云之ふかゝるへ吹かくしなきへといふこと
九八
東路の月入るかたにほのぼのきえ西のたかねみゆきたなり　読人不知
たかねとは山のことをいふなり
御製久奇云
たかねみるまゝに出ぬ月かけて移るかたにまひのむら雲
冨士十名　地本

藤嶽
塵山
新山（あらた）
神路山

鳴澤高根（なるさはのたかね）
二十山（はたち）
見出山（みいたし）

常磐山
三重山（みへの）
三上山

秘花抄下終

新撰髄脳

公任卿作

歌のありさま三十一字惣して五句あり上の三句をは本といひ下二句を末といふ一字ふたもしあまりたれともうちよむにふるゝ事なくはくせとせすおよそ心ふかく姿きよけにて心にをかしき所あるをすくれたりといふへし事おほくそへくさりてやとみゆるかいとわろきなり一すちにすくよかになむよむへき心姿あひくする事かたくは先心をとるへし終に心ふかゝらすはすかたをいたはるへしそのかたちといふはうちきゝたるにきよけにゆへありてうたときこゆるもしは先達しくそへなとしあまたなり侍るにえらふる中に古への

人おほく本に歌まくらをおきて末におもふ心をあらはすさるを
なん中頃よりハさしもあらねとして先におもふことハいひあ
らハしたるハなをわろき事になむする貫之躬恒ハ中比
の上手なり今の人のこのむハこれかさまなるべし
風吹ハおきつ白波立田山夜半にや君かひとりこゆらん
これハ貫之か歌の本にすへしといひける也
難波なるなからの橋もつくる也今ハ我身を何にたとへん
是ハ伊勢のこか中務か君にかくなむへしといひける
意也しとみ侍し問にせし後補ハこれにもあるによりて
これハ深き義ありとまけふてしへりける奇なり

世の中は何にたとへん朝朗こきゆく舟のあとの白波
あまの原ふりさけみれハ春日なる三笠の山に出し月かも
和田の原八十しまかけて漕出ぬと人にハ告よあまの釣舟
これハむかしのよきうたなり
おもひかね妹かりゆけハ冬の夜の河風寒み千鳥なくなり
我宿の花見かてらにくる人ハ散なん後そ恋しかるへき
かそふれハ我身につもる年月を送りむかふと何いそくらむ
これらハなむよき歌のさまなるべき
事とはまほしかる中にもすくれてこれハ妙なる所に同しうゑ
此何風なり但しこと葉なしかれともよしとなるハさる絶

うた
深山には松の雪だにきえなくに都ハ野への若菜つミけり
ちとはしらるれとも余情しきとえなりさるへし
月影の今そなきさにかきよせるみさいの分の声さやく之
言とりしられとも余情しきいつまてさるへし
みえうへひとかきて中納言家持卿の下露ハ殊にまさられり
まされるその詞時ハそらしてさまへうた
奥山にハ何しれなかりし紅葉の詞野の露のさしを付ふかり
ちとさらにとりかへしてよみところくにお伺しすお座ハさる
さ候なりちの所よハさましにさるへうたま二句に末るはしく
何事ハ世の人多く申さ候その句のさへに何もの格ところの無乃
末よりみれ耳によく聞りてよむ事なる
ちりぬれハのちハ何もうたなき花ハ思ひあうもまうふて不
句と定てしもさうさんよりハとうりて定めるところなり
句のさへにして無れ来ところに何れともくせとせえぬなり
冬の天の河原れそうし守居ハかなハかちくくしてよ
凡たらしい色しく何節りおひしうる所にて無かなきけよくそろ
らひきりてまされたる何所よ何しまハ読色うちたりかもらし
なりの古代にて無なきハ作格によむましぬすし人のよふあらむ
無とふしるまへるろへし言とめしまてもめ候てしきところを無と

よみいでんとすべし古は本文にてある歌ありそれは世
いふ歌の心はしてみればおぼえありていひあれども
人のこゝろへかなきことゝけひするなんありけるむかしの歌とこ
のこて今の人このをよむ見ればいとよりすまじとおもふらめどもすべて
はしもおぼえぬは歌ちかきなくなむあるべきこれはこの人の心あり
あつるみなまことにまことあらくおもてもあるはいぬ人のよある粗
きゝにくゝあるべし
かし歌とめぐらし寄三十八文字あるべし
またうたをこける歌はむらひおきてある時よりそしらぬ為にもひきれ
本つはをよる人よりのまゝにはられるのそこた白路かは何の花そと

さゝれのさ歌
我のとたかきる君のこゝろなかりそあらは人かき歌さんみまくそ
又うこまつり貫之かかなるまこぬるにこそ日本紀
くるしのうた所
よみ侍るさとこころなり
これにて
又見て侍し

新撰髄脳畢

莫傳抄

俊頼述作

加賀の菓　正月一日大内餅の上に並大根之

ぬれ菓此中にもさかえかゞみ菓餅をそへ正調にそなへ侍る也

初代菓　正月三日大内よりくだる門松なり

おほうちやまとしれ山の初代菓いく年人のうれてう色之

初見菓　松なり

ときしらにみどりの色もかはる菓らはぬ色も名にあひ侍りし

千世見菓　松の惣名なり

神山のぬれにおふる千代見菓う色そへてこそ正調おそなへ

千代若菓　正月七日菜の菓御そへて正調にそなへるなり

いはくもなやかしん千代は草の調の来ねのかさはせふへき

根向草　せりなり

渺としたる川流して花よ根向草にむけは袖にゆきいは処りはし

梅散見草（カサミ）　梅の花の古名といへり

山里は朝霞よりけるかさみ草打ふらちよ風人のう空はよ

尋深種（イロミ）　櫻草也よみ名也し

夏見草　さくら

吉野桜植たし山の言見草むかしよりうへるを弥咲なり

植並て見る人や何の夏見草何そとも春ぬなりふのいのちふ

ゆるかくさいら折人の色とまてかくえう絶世に露とこすらん

手向草　さくられ小池にうつるへし

花さかりはあれと文かふ手向草一夜のうちに二葉まそなけれ

多毛草　松のこけなり

山かけの里にゆかりの手向草花や咲かしかこりなへは

他夏花草　花

花さかりは立田の山乃手向草夏やむかしの何その夕気

一夜草　すみも

一よ所に咲さ似しはいましへのなをとこへは今なめひらん

二夜草　さくられ

此のちれ神のめくみにかゝる色し二夜草もゝもの咲つゝ

一葉草　同

いのちとやかけてたのまん一葉草月にや花のさかんとすらく

二葉草　同

二葉にも流るのむる人のたぬへし月と文かの名とらひ作く

三葉草　云の木

何ほうちや名をむすさ花の三葉草に思ひて見えの郭を含し花

四葉草　同

此は花ハ四方にハ手みもおさ西の恵四葉草もも花さき作く

風知草　柳

松にのこととふハ新緑の風知草なくハ露の名つれ作らん

川骨草　同

浪に揺くも花にしの河骨草作しや淵のうち色に猫しん

花見鳥　うくひす

春ハいまや比なるりけく山さとの新に来て鳴をみやりそふ

火取草　浅し

花さけハ秋もさき行りに火とり草名にた紅葉の色にまけハ

二季鳥　雁

いろく紙婦をきしてゝ婦ゆきゝ鳥年に一ゝ花ゝつけん

二季草　藤

菱までも花やさかりん二ころ草松よのこきしが為名なれハ

松見草　ゆきち

咲りし花やおれ去も着よりり松見草よハ藤も咲けり

比酒下草　三月三日ニ大うち酒ニ入て飲桃なり

のむ人や千代と唱ぬへしみさこ草かすふすそひの色なりさは

此士石草

見しとくさ竹よる為露れ代ると唱て月やむかしの花よろしん

日新草　天川の昔代ていへり

古稀まてて秋や待らん天の川ぢけの草わりきさるぬまた

柿生草　去草わ生出ると云又ハ去草の異名なり

去為れぞしにかれにの草なるやさらへましやハ秋ふかれしてこそ

去生草　去草の生出ると云又ハ去草わ異名なり

秋かくよ跡への何らのあとふ草林（桂カ）の玉は月をえてうた

岩根草　まこひ

いかよ草おて山路はこぼさや家居をひのふひなりん

夏部

初見草　卯花

見けみ草咲さ咲ぬまた郭公為門日の山れ星よなりしるり

雪見草　同

おもとてとを家袖ぬれし雪見草ハ雪よ似るてやまこハ

佐見草　卯花
ほとゝぎすきてや鳴しも此草花咲よりり山里の名
形見草　行ふ云
唐に玉（王方）の華花と好みて花集てうへり所中にも行ふひ
とはこの世のうつりさまの後崩御なりての跡に皇子達
此の行ふひとしき向になされいあまひと記念草と云し
きえびひくりて花のみ此草いかなる草といはゞ行といひ知し
なでし草
さてしも記念草とやする昔大和国に人の子なるてしこ
と待てりゝもの後死て釈我子待てりなるてしこゝて
此れとやあり又なでしこをりて口伝あるし
うてゝれいなき世の人は形見草いくなられいそてめぐるらん
無去花　杜若
夏草れ此川さらちしかほよそ杜若まてもむら咲きふかなる
石竹　唐こなつ　李皇記あり
かゝる草花とやいふ石の竹なき世の人乃説とのこせる
雲見草　行ふち
山に咲き紫よかゝる雲見草なよいふすてとう紫めら
庭下草　橘
う廻遊し此ふいむかしの庭こく所咲る花のこ今此はあいは

秋待菊　菱田

咲けるは秋まち菊れよわくにこゝろ風は露のまゝにほころふら

水邊菊　夏田稲

咲く枝しまる田れ雨に秋ゆしこ流れけ菊をかりしいさなける

池見菊　よも波

影うつる花やくりしむ池見菊ゐすゐるかりて言葉うらいつ

露塚菊　よもちの實

なひまけし花や咲しん露た菊わらぬ枝も風の折ゐる

水塚菊　よもの岩

なれさういゐすこしや見ん影た菊言葉ふそうむさるぬまへすい

庭塚水　六月夜夕立の此庭よ露まり露るありけり

みすゞやめすしん庭のまゝしゆこもるれ老のゆふるれ

玉岩菊　みそなれ

いのちまかするふそうりふなれさけハ玉の露くれよいのちたの言

翁菊　松

きこよしや岸のゆうりのおうれ菊なりぬしてこら人とおちまて

氷室菊

難波すゑゆしといふなれ言むる菊代くの在あしにかゝ風そもかし

吹寄菊　ゆやめ

おほうちや玉の影やゝぬしき菊なほくもえ世ま言はれすやらん

光草　せり

夏の沢辺にしけりたるかれハ夜ハおほろく光くさとかや

火備草　螢の光かゝりける草といへり

よるこゝに河流れするに、そゝり草月の行る夜ハかすひ渡けし

夜半立香　[illegible]

おもさとり立しん川の夕くれなくれのまよひて月出する哉

姫か森草　牡丹

花とりハさかりても香のふくみ草花咲るはいろに見えてまし

名取草　わかん

都人のさかりなしとや名とり草も名の時をさかりもなし

豆見草　陶こも

みちのくのしのふの里れ河さゝ山あさゝの流れくゝ草哉

麦面草　大豆　又牡丹ともいへり

ちりとしたる雪とハ見えぬか夜こゝろの草かりをあのまの花の夕ハへ

以為之草　大角豆

いはし草いろなき露も色になるかもしきんと秋はさけゐる雪と見えぬを

為之理草　小角豆

秋ならハ風やちらんさゝけ草も秋の下枝にたえむ夕月哉

涼暮草　松風

なくせミハ山乃たゝみに時もなりきくれ草れ色の夕くれ

手到扇　　　　　　扇

てなれ扇人のうつゝにおもかはるまゝのえぬ時もなつかし

風待扇　　　　　　おかし

待ほしき夕くれ毎のかさち扇てなれし袖の月やとてまし

風為扇　　　　　　たれし

ともすれはなみたに吹る風の扇夕をまつや袖やの月かけ

秋部

初見萩　　　　　　萩

みふやうて隠母もまちうらさ扇まのふの夏の萩とみふに

庭見萩　　　　　　文紀

垣根にはいさ月かけ庭見萩おりよさし人のおもはさよ

秋逢萩　　　　　　元紀

いさち萩さや花さける時雨もよりの庸にとらぬ身に

濃淡萩　　　　　　元紀

今風さへいたれるさ人もこそ見萩をゝめてはいろふやとほ

露急萩　　　　　　吉紀

けふまては庭よとゝるゝ露そ萩かさよるそりの風や吹くらん

紅葉谷　　　　　　麻

紅葉谷立田の山乃峰ふ音小おはゝなくも立よりゆくらん

しられぬ女川田の山乃紅葉よりもみちの頃は夕ちれもなし

露岩草　萩

折袖をおもてにこぼれし露岩草かりそめの花のくるゝは

濃霧草　八月中の草の異名なり

そ風の名も千草の中にさる草のはひれとむ露や乱ん

さゝ草　松

とし露をとゞむるの名なりいろ千草かりそめのまも秋はきまつぬ

松無草　冬まで

秋風はふれむかさぬの松千草かゝ風霧そへ玉とこそなれ

忌

庭忘草　ちせと

吹風の音や庭あれん庭さき草に風は新聞れなりし火の氣

氣

夕顔草　ゆふ月

名におふ秋の風の吹かなるは出る月草といふそいふ風し

浅見草　かれし

行春秋はたれりし春分風胡蝶れかみ草も見えざらあむ

石草　ところへし

枯れる松風さる北しらされ石い草靜かさかるは花は咲ぬとも

忍草　ゆし

紅葉ふりいむさしさば忘草人も秋かうしたきまちのころ

形見草　菊

又ゆる葉ともはむかし奥州ふけつけの妻の跡まで生出

ころ葉なり又わすれ草とやいはん附は云始ころなり

なき人におくれてたむくるかゝる草今まてもわすれもやらてまし

百夜草　菊

忘らしな契はふかきこの庵のもゝ夜草を咲てしそ出娘になれ

新熟草　みそそぎ

忘れても恋しかるやおもはん年毎にあらき草は花とやおもはん

手向水　七月十四日に手向水なり

かふくていく世の人にたむけ水流されとのこれりに流之哉

河玉稚　竹の露

秋のせにまじらひる松をかもふなり河玉草にとしはきくなし

夕玉稚　おぼし

月ようつしうふ玉くされ秋風に吉いく度か袖ぬらすらん

次泯草　尾花

水にうかし風にしそよれをの忘しふる草てもかまわせて

冬部

初見草　菊

忘れ草の庵のくふしもさろ之草花咲かり霜やおくらん

霜見草　おもし

いく世経し松の木のはれ霜之草うつろへと忘れも忘ぬか

雪見草　同

忘れかたにぬかぬさきの露之菊秋ぞ待まりて花やおもしろ

秋忘菊　冬菊の異名なり

ちるはちり紅葉ぞかりに秋に菊かゝるこふにさけるはされし哉

初忘菊　冬梅　小春に咲なり

万代にさける中もとりわけ菊なをとまさてやむとかるらん

浇見菊　氷の上萍といふ之

波なくは何にさゝまし浇之菊氷のほれ之川の流の名

氷之浇

月の影に氷のほれまるといふ也して水の異名之賀茂川

に春細は之なり

伊勢をしみ出しのま紀吹色に色も浇とぞ何かりれにゝもし

親子菊　讓葉　又ゆづりはとも云之

咲しころにさの花生風たやこ菊人にゆつりし花を風やさそふらん

六花　雪

冬ながら吹もて散ん六の花手折袖まで雪れかゝる風

雑部

豊年合菊　松

海ぎはに立ちる庭さの花は菊風もかゝる花時にとぞ何れ

君子代菊　松

袖や香うつりる時絵こちよ菊久しき君れ庭にかけれ行

延見（ヒサミ）花　たれし

花は何かはいく世とかへん久見花かりそめなりのこゝもハ咲なむ

延喜種　同

春日野や若芽れ深の色さき花は咲けり若まとくまて

夕見花　心

白雲山とも月とも何かうとも事よるくまむといふと

たりよりありにも世の夕べ花月やさかりの花となるらん

暮見花　心

夕暮と月まつ程の花山のふかき雲の中れるも

折見花　心

たり見花枝のやかん事ふかれなくさまを忍ぶの夕くれ

朝見花　ちかろ

夜ふかみ月をや山のかさこ花をこさとのこなた秋の中君の

時見花　古ゝ呂

なその見ても花といふ見えにと紀に花なかりの雲とたしとおもふハ

初見花　ちかろ

これに花袖をかさしむれにみえるとしも見れとたれくゝを

同見花　云

山さとのなかにたしとの松もせやめさ深し花れをまなとなるらん

霞見花　心

ふるさとて稚へはなけん福寿草さくらの外よ葉も枝もなし

意草　古〻呂

かぞふれは千代ともいはん意草は稚さは袖はまくらなかりけり

問きくさ

月形て稚は又かくしとられ草夜半の夜に云とりゆりせは

十二月異名

彰新月　正月

くれし月千世かはらんと新草は又見る年の年はむかえ行し

年初月　同

むかしもいまや世になりぬらし正月名もめくりしくかよはしは

雪消月　梅津月　二月

としふれて春とも見えぬ富士の根は雪きえ月の比もぬれかは

大空もいつやとすらん梅は月いはゝに咲もうつふところ

花津月　夢見月　三月

さればこの月花よりほかの名のゆかりはむつましく我は袖ぬれぬへし

桜ちるころは花の山乃夢見月荒の春のゆきのなかり夜を

卯花月　夏初月　四月

夏かけり花の風こしちれとなる卯花月と何いとはし

ほとゝきす声はふきて夜は月さとはの山はかすみの處りふ

狭雲月　五月　多菜月一首の内に出二行り

みじか夜にえもあかで鳴きゆくも月たくさ月とハあれでいとほし

涼暮月　松風月　六月

風吹ハ浪によする谷川すゞしくくれ月のころにこそかよへ

雲ふかみ峯より山乃おろしよりハ松かせ月の夕ぐれをまつ

七夜月　秋初月　七月

星はしのちぎりやいかん七夜月まちしよのをしれはあまされぬ

かもすゝハ行てといはむ松かぜの秋のよ月ぞ清くこそ志れ

木染月　萩津月　八月

松ばえて色ぞそめし木染月露やむすびしそや流れき

いろ〳〵に乱れ咲てもしをれけれ萩津月にハなる何その花

菊開月　紅葉月　九月

ちり菊ハうら枯てし花もなし葉さ紅月ハ花とこそ見れ

よしの山吉根（み）らる子のもみち月志られぬりきて志られけるかな

神去月　神無月　十月

出雲なる松の葉ちれ文かよハ神去月とするぞいと恋し

神無月如月もそさゝめかなし志られや見れそぬらん

雪待月　神楽月　十一月

山風ハ雪待月といひなし暮ハ志られて如らぬくもりハ

四方よりふく風神楽のこゑき月天の岩戸も今や明らん

暮古月　親子月　十二月

古のあはれ今や咲らん難波江のこれこの月はみなもなり給
歌人のこたまともいはれたやこ月松やいのちはたのしきすらん

慶安元年六月書之

萬葉集草木花十二月異名集要傳抄終

和歌肝要

俊成卿作

夫和歌は神代よりはじまりて今に絶ゆることなけれはいひのこしたる常しもなく侍る事おほし去る風情もなしまれ世の人いひてかはしくもあるはつきせぬかはれなし人の心西のこそなれは其ことはかりにていふことかはしそのさるものゝけなかはりめれはなしかゝる所ものゝあはれを詞といひぬるにてもけし艶風情は侍りけるにと麗つきものなり又歌（ウタ）は人の心を種としてよろつの言の葉となれり男と女との前は飾りに作り出しもなし気なしなかれてとることのたかなりよそてもたさそら出へ給ふいはつきぬ信俗の歌はも緑

こしをば添へけるみてうへしたてなりあはせて云ふも皆
とゞくとやうにもよむつぎなり歌のむねこしをそといひまる
えんのとふといふは
春の相にを紀いらぬつぎ翁ら形かの水口ふおと入るや
春の句といふは紀入とえんと詞七水口といひ候れはおと
いれうやて見むと詞候ら中ーのとゞとえんの字をもうへ
したをもいふなりむねこしをそは初のみ七よつゞる詞いとい
む緑とゐつけ次のみ七よつゞる詞いとみおしといひおはりの七と
よつゞる詞いとみをそといふなり世に云ふるえんの字とおうに
終哥といふ道う渡しと渡り腰よえん字とをへきるとは腰

おれと名付てをつゞるものなりも緑をそはとものつゞりえん
あられども腰よえん詞れは云て始し方としそいそうれとも
哥の名とはえらゆ又をもしおし哥まふうへ云ふみえんの字と
はもへ渡しこと事のえん詞ると渡しくるなり此句でもへぬ
もは哥と云ふものなりぬるものなり歌の句りあかさる
むは哥のつゞきやさしかゝさるむは云ふ云ふれむまれ渡るの
うゝみが道しうゝとうやよ海む哉實よは歌よ法絶をの
えんといゝを紀れしめて胸腰をそにをへよかへんてきえあて
中ともよ上ともをそともはゝりてゝ道し先哉句よ海ゝし
うこも詞り中よりよ海りしをそよりよまうし哥も

けんあるとあるすを発句にいへるむとありへハ歌よみたし
又之訓よえんの字なりしんといハ勝一両にきえむて出さして
されはんほうにそふるも持の字ならハきしと哥によむへ
きまり候さ勝によえんの字なくても持出たにえんの何かた勝お
なるぬ秋何り侍ほさら心るのきしとも持にときたとへハやう
てその花席とふまひて作もそやさし紀まておなり候る也と
いひ作れハその対句とめて勝といや作めし花席たらいて
その対句も持まても勝までも心さまりてたらひぬれハ勝おれ
あるへしこらとめて哥れこしおれといふ志るなり或呉本よ紀
歌と勝おといひ見る紀といほしるとおれそといふ恐よと何り
作れハ右の為なり勝よ運ふると作るへうしれ歌當のたと座守
とおれしろといひこれ紀といわそといひしろす之此外右の為
作るへうしきるもの之哥よ作まさの志れ何り

長歌経歌旋頭混本廻文隠題是之

一長哥ハ卅一字れ哥なり経哥ハきしろよ句作まれる哥なり旋頭
哥ハ三十一字の哥の文字まても七文字まても一句餘まるを
云なり廻文ハ三十一字れ哥を上からよむも下からよむも同し
ようによみたるをいふなり隠題ハむ持といふつき事を讀かくる
なり

一三十一字れ哥ハ初の文字によみいくそ候る哥絶の七くにあり

まてこと語といひなけるゆひさ具志るすのさしよりて長哥

といふなりなるかれも短哥といひしるすハ初いひいへることゝ

とよみて次してえんよむかれてうけりいひ（いふ）りくけるに志ゆま

うたそれぬるこゑの形りすひろれるこゑのうちと心も出版たまれ

ぬれハなかしてせん議ふ字ふ流きて長歌短哥段よふなまハ長

哥とハなるにといひ短哥といひしとたみしるに混本とこそいふ色

られも義よ流きて長哥短哥とはさるさめる風物なり

旋頭證哥云

かの岸よ草かるたのこ志るかりそ五流も君かさ段さんみまくさたえ

まれうみそこなるかけふ向ひいてみ風附よこそ志る如翁よ何ふ如地に枝れ

混本證哥云

ゆきゝ日の夕かけまてにちりやちる花の香そゝし

廻文證哥云

むらくさにくさの名ハもしそなハらハなそしも花の咲に咲く

らむ此ハ

これこし出孫とのこの出孫こしてのこれこの志てむかえ紀

ハらむまこゝのまゝのみ流志てとりともし

委するハ秘するされハ志るさん難へし

隠題證歌云　（ひちりきをよめり）

たくしも出そもとしゝも咲とてその日ちりきて志る人そなけれ

此外折句の哥といふものあり 俳諧といふものあり

一 沓冠の折句といふハ五七五七七の上下に文字をすゑるといふもの也

一 冠といふハ五七五七七の頭に文字をすゑるといふなり

一 俳諧といふハ狂哥なり

一 沓冠の折句の證哥（あはせたきものすこしと云ことを）

あふ坂もはてハゆきゝの関もゐすたつねてとひこきなハかへさし

一 冠の證哥（さくらちると いふことを）

ことの葉もときハなるをはたのまなんまつハみよかしへてハちるとも

一 俳諧證哥

秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし花もひとゝき

まハ鳥ハいかゞしのいねとさへ世ゝん所が所よしとにこきくといふ

又或本云

まハ鳥ハいふもの稲の所を出ん所が所よしとにきけくをも又ぬ此の古例一かしさうに當世このをよむつき哥ハ去嫌せぬれをにの病八のやまひなし

一 哥病とハ

岸樹 風燈 浪船 落花

岸樹 初一二一同

風燈 日句二字同

浪船 五言第字五七言六七同

落花　毎句同

一　八病者
同心　乱思　欄蝶　渚鴻　花橘　老楓　中鈍
後悔

一　同心　文字ハかはりて心ハおなしき

一　乱思者　第一初一字第四句一字同
恋しさハ同し心にあらすともこよひの月を君みさらめや

一　欄蝶　初五終一字第五句終一字同
櫻ちる木の下風ハさむからて空にしられぬ雪そふりける

一　渚鴻　第三句終一字終七一字同
ほとへ八重山吹ハさかさらんちりけん後のかはつも見ん

一　花橘　是ハ五文字ハいひかけくしけれとも葉ハなしとよ
ことなり上をよむつきのはしよみかへりけりかくのことく
なりてハいひかけくしけれとも合かたしといふなり

一　老楓者　おひらくのてといふ事ハ上をよむつきすと云之

一　中鈍者　五文字を六文字によみなし七文字ニ八
文字によみたるをいふなり

一　後悔者　歌をよみてさて何の字をとかくいひなして後
悔ることをいふなり

此書和歌肝心也納箱底輙不可閲之非器量

縦亦之仁者莫免他見縦汉雖為器量年齢之多少

可授之更可出閫之外而已

建保二年三月日

歌林末学隠士　在判

永仁四年十一月廿四日當家相傳秘書輙雖不

可授以斗藪之次面謁之刻當道専志深之由懇望

之間書與良瑜争努々勿許外見穴賢々々

理達判

後鳥羽院御口傳

大和哥を詠するならひ昔より今に至るまて人のいふ事もしるさるゝは心々のうたしるむもよれは唯天性を得るはおもてその身の風情の妙なるをもつては志らすいかれとも善悪ところにつけては進退を疑ましよるその中姿まち〳〵ふして一隅を得たりかくし或うるはしくけたかき姿あり或はやさしく艶なるあり或は風情ともおもしろきあり或は姿をさきとするありこれによりてことのおもてハ則しるきには要とせられハ又合あらハれかくし今初心の人のために略してその至要なるあらはすに七ヶ条あり但人によりて辭砂

もつきるまなり（ゝやイ）

一和歌学問して種々の難儀をもとさとし古学と思ふ
るゝ人はまなひしよのつねのうたは古き万葉集はかりよみける
やうにおほえて（とイ）そ思ひしさりそのことも用なしとて此る
世様は人の万葉集の詞ともとりて詠し出る哥ともえよまぬ
なりされは無下のあまりて末の世に文字れこ（こゑ）へはかりとよみ
へん〻〻又一反人も問てきゝへよなり古今集をも見てハ
好しくに倣れぬつき哥とも又さ散くの哥をも得くして
のをくれしうり必ず然まちつきなり

一道とこのむはなりぬれはめつらしきとこゝろ見て指燭一寸
に詠し一時に百首を詠しなとまする練習れ為あまに
よみまとも古く百首を詠して詠畢ぬれは又うち見く
或は等韻或結題とうへそ之詠まうらいふも始終を絶之人に
見せんしてよき窓されは平常の用にかなひて窮竟のる
まて有るなり根こりしぬ哥は十廿首なりともよく見れと
も百首なとにあれは未熟よかるなり遠慮の事なり

一まきし此ふうに万葉集みてをかりは百首の哥迄は万葉
集の詞ともに源氏等の抄をよりみる此は又其様になる
とよくし思ひてこの後とし

一當世の上手なるのおもしろく詠しおると見れは随うて

其の中にめつらしき詞なとをとりてよむ事もまゝし此哥
人のさたまれる事なり用意有へし

一此ころ此題を詠しならふ輩さへ近代何まりさらひふ
入ぬるに結題の哥とも題の心いとゐられもなしかくに
とてしぬるにさることもあれハ季経か一具（百首イ）といひけるして平舎を
ある事顕いとれなし寂蓮ハあまりた不請（文イ）をしけるに云題
れ哥とて結題の哥とをくはしくなり論もなしとて中比も
具謂何ありける寂蓮ハことに結題とよくよみしるなり定家
ハ題のさたいまく世ぬそのなり出れなよりて近代初心の
其のことかゝのこと謂ありけるに結題といふよりくに入て
題の中と詠されいしこそ其も何ある事て侍（けイ）れを代の祖ち
念なれ此ころ必時々詠ありふつきなり故中院殿つ拾遺ハ
結題にも題とむねとはつよしてそ中されしか池水半氷を
以子題まて

池水といふ流れ吹ふて出まれるほとの氷ハさ融推前
ときよ海れしかしも哥かくハさ融てなかもしるも題の心まを
いみしくなりへて其も何ある事て侍り此

一歌合の哥とはいゝしつゝまたよみれるこそ其秋何寂蓮
なるらハ中せしか別（一定イ）の候まていなし題の心とよくためしへて
病なく又源氏ホの物語の哥れ心とは其の此詞とゐる事

ゆるしかれとやさきをよつて物語の詞なとハ百首の哥も
とらぬなりされとも近代ハそのさたもなし

一兼題の会なとハ先題にてよみける歌毎ニ詠しとれて文上に
率よみ申してや出されし業されハ今のさいらてよ紀も出されるゝ
一番よりよみしかれとも業されハとらし所々に花出て今もさい
まて席歌も出るこかくのしと紀の事寄傳られとも堂と有異に
元哥の姿ハ西のしくはして一様なりけれともくもの出所に
いと珍しく候但或は近世の上手の中に其の歌を見をし或ハ哥
をもおしかさの花無し大納言経信しよたにも見えたり
そしくて猶も公なく云たみゆ又俊頼塩能のそのすり哥
あるに二様よよ見りうるはしくやさしき紀様もしらた寄く
ことも又もえくと人いえよまた古今をぬ様成る姿をもい此一様
則定家など廉義ある事をうなり

うかりける人をはつせの山おろしよはけしかれとハ祈らぬ物を

此そうたなり又

鶉なくまのゝ入江の浜風よ尾花を波よる秋乃夕くれ

うるはしき姿之故去御門内府亭まて新儀の何をしたに秋
何これほとの哥あまたハ出きかたしとや紀友と残したる
事も深かりけりくよ紀結歌と人のよきもけるよハ家中れ
その花その歌とよ合せて紀風情とその何のそ何れハその紀

も見えてよくきゝたるとしておほくの秀哥をもよみおけり（きイ）
俊頼か後には釈阿西行俊恵なりまたかくしきにいたらぬ躰之
釈阿は優しく艶に心もふかくあはれなる所もありき
殊に愚意に庶幾する姿なり西行はおもしろくて（イ二ナし）しかも
こゝろに殊に深くあはれなるありかたく出来しかたく（うイ）て
ともに相兼て（たりイ）見ゆ生得の哥人とおほゆこれによりておほ
ろけの人のまねひなとしつへき哥にあらす不可説の上手なり
清輔はさせる事なけれともさきにたるやうしおほすまし（とさくイ）見ゆ

年経たる宇治の橋守こととはむ幾世になりぬ水の水上

これ躰之俊恵法師おたしき様に作り五尺のあやめ草に
水をいかけたる様に哥はよむへしとそ申けり

立田山梢まはらになるまゝにふかくも鹿のそよくなるかな

釈阿優なる哥に侍りと申き近き世にとりては大炊御門
前斎院故中御門摂政吉水大僧正これら殊勝之斎院
はことにもみもみとある様によまれき故摂政はたけをむね
として諸方を兼たりきいかにそやみゆる詞のなさ哥ことに殊
勝なりき不可思議なりし百首なとのあまりに地哥もなく
見えしこそかへりて難ともいひつへかりし秀歌餘り多くて
両三首なとは書のせかたし大僧正はおほやう西行かふりなり
すくれたる哥はいつれの上手にもをとらすむねとめつらしき

我とこのまれきましらにこゝぬりおほく人の口によまぬを

朱点　やよしくれ木の葉に袖をくらぶなへし

朱点　袂からくはしほりしやみちぬ

これ神さびされどもよの後によう歌はしくすこぶる中の容

上の抄ともいふなり

朱点　何ふさはいさよ　　朱点　浅くもりして　　朱点　雲に何かそふ

朱点　秋ゆく人の　　朱点　松とをしれの　　朱点　庭のむら萩

朱点　かはる人なれに　　朱点　しげる川沢　　なかれ水

此外おほくありけり又寂蓮定家家隆雅経秀能なり寂

蓮はるとさりなしたおよみしその錦り葉しくさきし

猶よまけるを聞ていくらかはなかりしかどもいさゝた

まつ何の哥よまんとてころしの松くにかゝる白雲と云朝れ

哥によみ出し松そろしかり紀おりよ流てこそ哥すこ

ま哥しの其狂哥までもまえうの事も（みイ）此人を根本何にし

かくは定実家能とえとき家隆は若かりし松（時イ）りはいとききこ（え）

えらしくて建久のころかひよりしとに名誉も出きたり或

哥よなりてのちるさ雨もいくしく秀歌ともよまれ何流れぬる

おほき雅なりもまさり新り定家も何りともめ流ゆしく

又ぬ雅経いとしに業しかりて哥よみしその郡りいくく

たけた哥なれはむねとおほくはみてさりしからもまたありと

みつね秀能は身の程よりもたけありて高てなれる哥も
時分によりてハ思ふる風にかはりぬまゝにもよきめちゝ所
哥ともみれ中よひさしのひらる物ともかりぬきつゝ年
定家云下れ哥乃よしとやとさこ西
女房哥すこまハ丹後なしつれ哥阿まさよめり
朱点　苫のたりうにかゝる松も　　朱点　木葉くもりて
朱点　浦ゝく船ハ何ともなし　　朱点　くなれしの云ね葉
朱点　しらのかけ経霜の何うに
古のかも知ゆくやさしれ哥ともかりき人の好知よりも
過去よしとにつゝ知ゆくきを揺路ハかくよ専れよし依

さるさるし世人の老の後かさかりきるよし度ゝ申されき
定家ハ左右なよきのなりさうしも殊勝ならし父の跡をたむし
まもあさくとなりひぬしうへハまして餘人のうたかたうるも
およそはやさしく思くとかる中ゝに九意ありそらこまてと
ふかりかて又為道ふ達しなさ候て殊勝なる也哥
こ知たは京家中しまるりれ但川級の心ふなりぬれハ
庸れめて馬をしかとし傍若無人としかりもあるれ
他人の詞を少々取ハ其しくて彼心の哥好知の意ハさうら
も下になりおよるといふとなし又まのにもれら不なれハ
よりて我哥られとも自讃詞る何さ派てましなるとハへそ

腹立れ年を経り先年大内の花の盛りむかしの春の西
親思ひ出られて忍てかれ木のもとにて男もすがら御后
ましに定家左近中将にて詠していはく
としを逸てみ幸になるゝ花のかけふりゆく身をもあはれとや思ふ
右を次将として多年をとひき述懐の色もやさしくえに
うくことかゝも希代の勝事にて有りき尤自讃まつき哥と
みてき先達より必哥の善悪をはよれしとかやさまく
おもしろくもみえやうなる哥とは必自讃哥とれ定家卿の哥
よみをりし日大内より硯の箱のふたに庭の花ともり入て
中御門摂政のもとへつかはしをりしにさそはれぬ人のため
とや残りけむと返哥せられしハ何事かちかふ哥のいみしさ
そていふなりしかとも新古今に申入てこのたひの撰集の
よろ哥よハ是詮なりとて度々自讃し申されけりと此侍り
此昔よりかくこそ思ひなしそしられ哥いひたいみしけれとも
異様のふるまひしてよまさる哥の家なとハ勅撰にまゐる
人のもとへとゝまるなしこれらの族実否しらぬ者のやハ何哉
されとも左近の構れ詠まれもせぬよしたゝひく哥評定の
座にて申此家隆なともきゝしらすこれらに付ハ之
最勝四天王院の名所の障子の哥に生田の森の哥入
そとて承りて何さたりそ志阿剰禄との遺恨かへりき

ハそのれゟ放逸としるゆゑに清濁と弁ぬハ迷服なれ
とも代々勅撰集にゐるともかくこそかうしもあらしも萬人の心
にかなふ事ハあるなれとも傍若於誹諧せる事さハ何ぞ然し
て彼ゝゟ奇のおもしろく殊勝のめあるれとも人のまねふべき
風情にハ何ぞ心品なるとは廣幾をさしくゝ姿
のえんに見えし沈厚本歌と云所聞其骨あられさうむ初心
のこゝのまねひて正雅なきことになりぬべし定家ハ生得の上
手ありてこそ云るまてなけれとも けしく見えいひ随ひきれ
きこれハ殊勝のこゝろきてこそ何れ
秋とハ吹あへぬ風尓きこゆるハ何れ杜乃露の下葉

まことに秋とハ見えうちそめしめるより吹あへぬ風尓
きこゆるといふ所謂深き露の下葉とき下の句上下
結ひなして優なる奇の本歌と見るかの障子れ生田の杜
の歌ハまことにまさりて言あらむ志らぬ何れもぬけ乃
失錯自他いまもしかるへきすなりされハとてあるしといふ
るゝへきハ何ぞこの奇もよろしみ所へし詞の至さし
くえんなる歌ハ心そ西行もいふハなき之表の下にかし
かれゝる手れ何ゟより歌ハ京家もしとけりもあるれとも
いひなしゝる云葉深きのハみしきまてこそ何れ案内
志らぬこゝのかたハ人紙の奇どいふるゝとも切得ぬ間彼ゝの秀

哥とて人の口にある哥おほくもなしそのけうゑもめし
ことには不変なり釈阿西行なとか最上の秀哥は詞も優
にやさしきうへ心ことにふかくいはれもあるゆへに人の口にある
哥不可勝計凡顕宗なりともよきはよく悪しく見ゆる間
一まはりに彼卿か我心にかなはぬ所ありて左右哥みしらぬ
と定ることも偏執の儀なりまゝことはかなはぬこともある哥
見しらぬハ事かけぬる事也撰集にも入て後代にもとゝまる
ることハ哥にてこそあれあまたひ見しらぬとてもさ候てつゝ
みなあらん

仁治元年十二月八日於大原山西林院普賢堂以教
念上人所持御宸筆本書寫之畢頗有由来尤可
為珍寶之　（此御草本之外他所無之子細雖尽筆紙）
件乃教念上人ハ彼院に遠所まて付まゐらせていまその
御供まてしける人となむかやうの物とも皆焼失してけれは
中に残りたりしを見て一巻ぬきそこ書之
貞和六年二月朔日栗田口寄宿坊書寫之先年
以蔡花園上人本書留之処法勝寺六僧坊炎上時
合焼失仍重而写之
寛正六年十月廿四日
左近太夫平

六部抄上　和歌式

定家卿作

ある人の哥はいろゆにおもひつきしものそことこかれて侍しかはところ
ろかはゐ云ゝ見けるにおもひ見きまゐるまと云ある侍らしい
さらのよしもなくさて詞に云作りて侍兄ゟりれと
ことおりふましのるすなりやまと家の至浅よまて妙らく
思紀よ他て於くし見紀まへ去る人又いくらく雅次昔し
貴之哥こゝろきくこにふけ及くてこともはよくきりて
おりしろさ歌のこゑ云て解脹妖艶の躰とすまたそれ
よりこのとその哥うまひうくるとよりかゝ云ゝよこの姿

かたにおもむくたゝし世くたりて人の心おとりてたけも及はす
ことはもいやしくなりゆくいはんやちかき世の人はたゝおもひ
えたる風情を三十一字にいひつゝけんことをさきとしてさらに
すかた詞のおもむきをしらすこれによりて末の代の
うたは田夫の花の陰をさり商人の鮮衣をぬけ
るかことししかれとも大納言経信卿俊頼朝臣左京大夫
顕輔卿清輔朝臣ちかくは亡父卿すなはち此道をならひ
侍りける基俊と申ける人このともからすゑの世のいやしき
すかたをはなれてつねにふるき哥をこのめり此人〻のおもひ
いれてすくれたる哥はたかき世にもおよひてや侍ら
む今の世となりて此いやしき姿をいさゝかかへてふるき詞
をしたへる哥あまた出来たりて花山僧正在原中将素性小
町か後たえたる哥のさまわつかに見えきこゆる時侍るを
ものゝ心さとりしらぬ人はあたらしき事出来て哥の道か
はりにたりと申も侍るへしたゝし此比の後学末生まことに
哥とのみおもひてそのさましらぬにや侍らん只きゝにくきを
ことゝしてやすかるへきをつゝけかたくまなひなすとつくりて見ぬ
うつしまねふにおもへる業はまことになりて侍るにや此比と
これまへしらん人にあれとくはしくさとるへしともおほえたりふ
うたへるものゝとりわけた重代の名をとり承はらへてはあらひはなら

かゝれ或はそしられ侍れともそれより后を好むともからけて
さだかに人のゆるさぬ事とや侍るよりかゝるならひしる
す侍りしをところかなはたやの庵の訓とていふはころく見
なくゆ句はを何しはちゝろより出て云のつゝさゝる物なりと
そりや侍しゆとそれてましてなりゆりとまてなをとり
しるすも侍りしはいかんやはよのそこては庭まひもとも
くられつゝも好くしつゝ侍りきしらはしとその花さと曰
なれむの泉見かりとられて物とをかく云ひ侍くるす
も侍りさりしかはいよく何とかさなりくおもひまて侍るもか
きらえとろくな敷むかし今こひ祢らひ侍る奇れさ段牛と

いさゝか侍るなりこゝろく好み紀と志るこひむは彩しきき
とりとめ及はぬ言紀鏤と祢らひて寛平以往れ奇よ旁
はとのゆるゝよ而し紀こともるとら侍りさらん好み紀とこひ
祢らふよそりてむかしの家れ詞と何しらあよみまく哥敷紙
なれはちなき本家とまとし中胚りかの本家はおりふなよなまとくへた
みもみの七みの字はさかのことまて七くの字はお新しく
後きつれは何てしも紀奇よ吟るすれぬ所そ侍るみもの
句はゆるしにまりてさるへきまや侍らんなまには

いそのうき好み紀見やこ　　ほとゝきすなくや五月
久かたれ何月の加く山　　玉ほとよ庭ゆく人

なしやすハいくたびもよまてハうるさく覚ゆれ

年の内に春ハ来にけり　袖ひちてむすびし水

月やあらぬ春やむかし　さくらちる木の下風

なとよむへうたを堂てゝ全作りしつきふ今の世ハ
かゝはるすかたのつゝきつハ世になくもさきのふりに
とそうりふハいときてくる所ハ一句もその人れよきたりし也
みえんこと誹諧をさしてまかしくおもひ給へ作るりさ
このともむき誹ありけれたまさきへおりふそうりて着る
のすしはしうらの事をそまひさうにするひしるするも作
らんいえんや雅俗なしとやするハ家々にするひ取たかける
まちとあく作るなれとさらに作るへきすさまし
詠ませけれたにつきさへ中古も人ゝのかきはしめしのるに
かはりたるすかたのことに作れハそしめて見し出て
におよびれ俳家の人の説いさゝかかはれるすかた作るし

大納言経信

夕されハ門田のいなはをとつれてあしのまろ屋に秋風そ吹

君か代ハ尽しとそ思ふ神風やみもすそ川のすまんかきりハ

沖つ風吹にけらしなすみよしの松のしつえをあらふしら浪

俊頼朝臣

山桜咲そめしより久かたの雲井に見ゆる滝のしらいと

ものゝふの八十宇治川の早き瀬に岩こす浪ハ千世の数かも

これハそれの奇秀奇の本歌とやいふへきにや

鶉なくまのゝ入江の濱風に尾花なみよる秋の夕くれ

古今ハちるまみち葉にいけれて新の字のふ字秋風そつく

これハ幽玄におもひけるすかたさひしさゆへなり

あすもこん野路の玉川萩こえて色なる浪に月やとりけり

おもひ葉に葉にまたむすふ露の色なるてハなにもたまれ

これハおもしろく見所あり上手のしわさと云〻

うかりける人をはつせの山おろしよはけしかれとハいのらぬ物を

と云風当の葉にみつゝきて勝の葉くちあちなるへし

これハ心深く詞心にまかせてまねふともいひつゝけかたく誠にをよふましき姿なり

顕輔卿

葛城や高まの山の桜花雲井のよそに見てや過さん

秋風にたなひく雲のたえまよりもれ出る月の影のさやけさ

高砂の尾上の松を吹風のをとにのみやハきゝわたるへき

清輔朝臣

冬枯の森のくち葉の霜の上に落たる月の影のさやけさ

君こそハ云ゆりや祈なんきみの葉に山もそよたき露とて

歌人ともとも此かとこれこハ流れるき家なりけり

なからへハ又この比やしのはれんうしと見し世そ今ハ恋しき

基俊

ゆくる夜れハいせの濱荻おり志きていも恋しらに見つる月かな

契りおきしさせもか露をいのちにてあはれことしの秋もいぬめり

先人

またや見んかたのゝみのゝ桜かり花の雪ちる春のあけほの

世の中よ道こそなけれ思ひ入山のおくにも鹿そなくなる

住わひて身をかくすへき山里にあまりくまなき夜半の月かな

難波人芦火たく屋に宿かりてすゝろに袖のしほたるゝかな

立かへりまたも来て見ん松嶋やをしまの苫屋浪にあらすな

思ひ来（き）やしちのはしかきかきつめて百夜もおなしまろねせんとハ

いかにせん室の八しまに宿もかな恋のけふりを空にまかへん

此うちに深山もそよにさやく霜夜もゝくもゝ火のかこふれ

しちのはしかき伊勢の濱荻も中〳〵の哥とも家によりてゆつゝしき哥よもあるましきによやしく労思姿なり

あれよりおほくしれハ我まよひてる哥とも見えにけるのまし

にえ思なり中〳〵ことちらへ傳らぬまて傳くとも

風なり雪ふきしうき風さへ雲なくて中〳〵なる哥の姿見ゆる

しくれハ中なり只今ねはてなるまてかれたれそて侍れハむけに

うきれ中〳〵に侍れとかくそへしまいてとのけうそ（え）へ侍らん

承元〻頃自征夷将軍依先人所注送之秘本也

弘長二年九月老後更書寫之

三代撰者桑門融覚（在判）

以祖父入道大納言自筆本令書寫訖最可

為證本矣

参議藤原為秀（在判）

六部抄上終